

# 東日本大震災とその後の子どもたちを

## 支えている人たちインタビュー

### 第15回

◎支えている人 / 話し手：栗林 美知子 さん

NPO 法人ウィメンズアイ理事 / 南三陸事務所長

東日本大震災での災害ボランティアを機に NPO 法人ウィメンズアイ (WE) の前身団体立ち上げに参加した後、宮城に移住。復興過程の南三陸町で、地域の女性たちとともに、人をつなぎコミュニティを育てる活動を続けてきた。地域の女性たちと地産品を活かしたパンを作る「パン・菓子工房 oui」の工房長。ワークショップデザイナー、国家資格キャリアコンサルタント。



#### 始めは個人のボランティアで

震災直後に災害支援のボランティア団体に参加したことがきっかけです。当時、東京で働いていて、何か手伝えることがないかなと思い被災地にボランティアに駆けつけた市民の中のひとりです。大学生の頃からボランティアには参加していて、海外での難民支援のボランティア活動に行ったこともありました。なので、バックパッカーのように荷物をリュックにまとめて背負って、いろんなところへ行くのは慣れていました。水道やガスなどのインフラが整っていないなんてなにかなるかなと思い、仕事は休み取って行きました。

当時、保健師や医師などの資格を持っている方を受け付けているところはありませんでしたが、誰でも来ていいよっていうボランティア団体はまだ少なかったと思います。登米市に拠点を置いていた、RQ 市民災害ボランティアセンター（以下、RQ）は、自分のことを自分でできるならだれでも受け入れます、という姿勢でボランティアを募集していました。自力で来て下さい、と、住所だけがメールで送られてきて、行ける人が行くという形でした。仙台からバスを乗り継いで行き、最寄りのバス停から拠点まではけっこう歩かなくてはいけなかったのですが、途中で通りがかった近所の軽トラのおじさんが RQ のことを知っていて、大きなリュックを背負っているからボランティアに行くのだろうと声をかけてくれて、乗せて行ってもらいました。

## ボランティアとして関わった期間

RQを立ち上げた代表は自然学校を運営している方で、阪神大震災や四川など大災害の緊急支援の現場に行っている方なのですが、その経験から、今回の災害支援は長期にわたるだろうということを思ったそうです。緊急支援として何万人というたくさんのボランティアを受け入れたのですが、そのボランティアは、例えば今日は瓦礫撤去の手伝いをする、次の日は物資を配布するなど、その日その日に必要な作業をするチーム制で活動していました。しかし、そういった単発の活動ではなく、女性たちを継続して支援する活動も必要だろうと、代表は考えていました。高齢者や子ども、女性は「災害弱者」と言われることがありますが、実際には、女性たちは、避難所でも在宅避難でも、高齢者や小さな子どもたちなどのお世話をしたり、食事の準備を担ったりする場面が多くありました。そのため、まずは彼女たちが倒れてしまわないように、女性たちを支えるチームを作ろうという話が代表からありました。私がボランティアに初めて参加したのは4月の始めでしたが、東京に帰ってからも何かできないかなと思っていてその話を聞き、後方支援として助成金の申請書を書いたり事務仕事の手伝いをしたり、そういったところを手伝わせてほしいと手を挙げました。5月くらいから準備をして、6月に任意団体として立ち上がりました。現地の活動としては、登米市の女性グループの方々と一緒に、南三陸町から登米市に避難している女性の支援をするための避難所での調査をお手伝いさせていただくところから始まりました。そこでは女性たちのニーズ調査として、サイズや欲しいものをきちんと聞いて、その人に必要なものを届けるということをお手伝いしました。

任意団体として、災害支援、復興支援の活動をした2年間は、私はボランティアとして東京で働きながらお手伝いしていました。立ち上げのきっかけとなった団体(RQ)は2011年12月に解散していたのですが、その後も女性支援チームは継続して活動していて、今後自分たちはどうしていくかということ話し合いました。その当時は、内陸にある登米市に拠点があり、沿岸部の南三陸町や気仙沼市に通って、日中に仮設住宅に暮らす女性たちのコミュニティ支援をしている頃でした。やっと地域とのつながりが深まり、いろんな声を聞かせてもらえるようになったばかりで、自分たち自身もまだまだやりたかったし、何かできることがあるのではないかと考え、任意団体をNPO法人にしようということになりました。そこで、私は2013年1月に東京の仕事を辞めて宮城に移り、法人化の準備をするところから、スタッフとして関わりを新たにしました。

## 法人として活動が始まる

法人化から一年後の2014年、トヨタ財団さんの被災地の先輩から学ぼうという助成金に採択していただき、南三陸町の女性たち10人くらいと一緒に新潟県長岡市に視察に行きました。その頃、南三陸町では復興計画に基づき、まちづくりのワークショップがたくさん開催されていて、新しい町をどうしていくかということ話し合っている時期でした。2014年は中越地震から10年の年だったので、この視察では、被災から10年目はどんな町にな

っているだろうというのを、南三陸町の女性たちと一緒に見ることができました。訪問先の山古志村は、長岡市に合併することはすでに決まっていたため、発災後すぐに住民全員が長岡市内に全村避難しました。その影響もあって、10年経って特に若い世代を中心に地域に戻ってくる人が少ない状況が続いていました。一方で、山古志に暮らす女性たちが、都会の大学生と交流するなどいろいろな形で地域を盛り上げながら、これまでずっと暮らしてきた地域で元気に活躍している姿を見ることができました。南三陸町に帰って女性たちからは、自分たちの町もいまここで子育てしている世代がいなくなったら町からどんどん人がいなくなっていってしまうから、子育てしている若い人たちが少しでも暮らしやすいような町にしなきゃいけないねという声が挙がりました。そこから、ウィメンズアイでも若い世代の人たちの声を丁寧に聞いていく活動を進めるようになりました。特に、復興工事が行われていた頃は、町の中をたくさんのダンプカーが行き交い、子どもが外で遊べるような環境とは言えませんでした。そのため、親御さんからは、「子どもたちが思いきり走り回れる場所がほしい」という声がすごく多く寄せられていました。そこで、イベントを開催する時には、子どもと一緒に来やすいようにキッズスペースを作ることにしました。2015年には、観光協会さんの仮設のスペースをお借りして『子育てフェスタ』というイベントを開催しました。今では、子どもたちが歩いて登下校ができるようになって、日常的に子どもたちの姿が見られるようになったのですが、あの当時は、町の中で子どもたちの姿はほとんど見られませんでした。そんな中で、子どもを主役にしたイベントを開催したら、町の人達もびっくりするくらい、たくさん子どもたちが集まってくれました。こんなに町に子どもたちがいたのだと、私たち自身も驚くほどで、会場に広がる子どもたちの笑い声に広がる場が、大人たちも本当に嬉しい気持ちになりました。その後も地元の子育て中のお母さんたちのグループと一緒に、何年かにわたりイベントを開催させてもらいました。

### 子育て世代の声

2015年頃は、前述のとおり、子どもたちや子育て世代が参加しやすいイベントを作っていました。その一方で、多くの住民の方々はまだ仮住まいでの生活が続いていて、日々の暮らしを立て直すことに精一杯だったと思います。「何か欲しい」というよりも、とにかく安全に暮らしていけることが一番大事という印象が残っています。母親たちも、子どもたちを危険な目にあわせちゃいけない、守らなきゃいけないという気持ちで、なかなか安心しきれていない状況だったのではないかと思います。

そして、2017～18年くらいから徐々に次の住まいの場所が決まり始めましたが、それでも子どもたちは歩いて登校できる状態にはなく、バス通学が続きました。そういった状況が長期化していたこともあって、家が決まって、新しい場所での生活が始まっていく中で、「これからの町でどうしていきたいか」という声に徐々に変わっていくタイミングだったのかなって思います。

2020年頃には住宅再建の目途がようやく立ち始めたものの、コロナ禍が突然始まってし

まい、せっかく落ち着くはずだった生活にまた新たな制限がかかるようになりました。

そう考えると、町の多くの人が、「暮らしが落ち着いた」と感じられるようになったのは、本当に今（2024年）になってからだったのだと思います。「前はこういうのがあったよね」、とか、「以前のように、またこういう風にしたい」と言った声が出てくるようになったのは、ここ最近のことなんじゃないかなと思います。ちょうど震災の時に生まれた子たちは中学生になりますが、その世代のお母さんたちは、ずっと不安の中で我慢しながら子育てをしていたのではないかと感じています。一方で、いま一緒に子育ての取り組みをしているお母さんの中には、震災後にこの町に移り住み、復興の取り組みに関わってきた若い人達もいます。新しいことに挑戦したり、自分の考えをしっかりと伝えられたりする女性たちが増えているのも、とても心強いことです。これまでずっと一生懸命子育てをしてきた人たちにとっては、変わらないことが当たり前になっていて、自分から変えようとするのは、簡単なことではないかもしれません。それでも、そうした人たちとも一緒に、町の子育てのことを話し合っていけたらいいなと思っています。無理のないペースで、少しずつ、一緒に考えたり、一緒に動いていけたら嬉しいなと思います。

### 子育てサークルを作る

南三陸町で子育てに関する取り組みとして最初に行ったのは、課題を調べるニーズ調査でした。当時、町内には子どもの預かりサービスが何もありませんでした。民間の団体もベビーシッターさんもなく、行政による一時預かりもなかったのです。園の延長保育はありますが、赤ちゃんから未就園児を対象とするものではありませんでした。これまでは三世代で同居している家庭も多いから、家に見てくれる人が誰かしらいる、だから預かりニーズはないということだったのですが、実際にニーズ調査してみると、同居している家庭であっても「預けたい」、「利用したい」、「あったら使いたい」という声が半数近くに上りました（南三陸町の子育て環境に関わるニーズ調査：<https://womenseye.net/report/6022>）。

今は、試行的な活動として、「あずかりあっこ」というお母さんたちが小さな子どもを互いに預かり合う取り組みを1年半ほど行っています。この取り組みを続ける中で、一時預かりやファミリーサポートセンターといった制度の必要性を、町にも働きかけています。

町内の保育所では4月入所の待機児童はいないですが、月齢が10カ月にならないと入れず、10カ月を迎える前に育児休暇が明けてしまうお母さんたちは、育休を延長するか、仕事を辞めるしか選択肢がありません。もちろん4月になれば入所できるのですが、それをもって待機児童の問題がないと言い切ってしまうのは少し違うのではないかと感じています。

お母さんたち、女性たちのエンパワーメントをすることで、自分らしく力を発揮できるように応援していくことは、私たちの大切な役目だと思っています。子育ての取り組みを始めて2年、みんなで集まっているいろんなことを話し合える場がようやく整ってきていると感じています。ただ、周りから見ると、「積極的な人たちだけがやってる」というふうに見えて

しまうこともあります。でも、本当はどんなお母さんにも、気持ちを話せる場があったほうがいいし、声をあげたいと思った時に、だれでもできる環境があってほしいと思っています。気負わず参加できる雰囲気に変えていきたいですが、どうしても少しずつの歩みになってしまいます。短い時間でもこどもを預けて自分のことに使いたい時もありますよね。でも、そうしてもいいという空気ができていないと、周囲の理解が得にくかったり、お母さん自身が罪悪感を抱いてしまって、参加しづらくなってしまうことがあります。

あずかりあいの仕組みでは、登録してくれたお母さん同士が、子ども 1 人に対して大人 2 人で見守ることにしています。しかし、お母さんたちだけでは見守れない時もあるので、手が足りない時にはサポーターとして、住民の方々にボランティアで参加していただいています。サポーターさんには、保育の安全講習を受けてもらい、安心して関わっていただけるようにしています。

何か新しい取り組みを始めると、どうしても冷たい目線や心ない言葉をかけられることもあります。正直、私としては、とても悲しいです。やっと動き始めた町の子育ての取り組みを、どうか温かく見守ってほしいです。

## 移住のわけ

宮城に移り住んだことはすごいことのように言われることが多いですが、自分ではそんな風には思っていません。2011 年から 2 年間は東京の仕事をしながら、週末に宮城に来て活動したり平日の夜は事務仕事したり、ずっとボランティアの活動と仕事を両立してやっていました。体力的にはすごくきつかったですが、現場でいろんな出来事が起こるので、毎日その報告がメールで届くのですが、それを読んでいると現場に行きたい気持ちがすごく大きくなっていました。週末に宮城に来るたびに、人とのつながりも深まっていったことも背中を押してくれていたように思います。代表の石本はボランティア仲間とシェアハウスに住んでいて、私も宮城に滞在する時に使っていました。移り住むことになった時もそこに入ることができたので、新たに住居を探すというよりは、いつも来ている場所に住まいを移すという感じでした。私は、学生時代は国際協力などに興味があり、途上国の仕事に就きたいと思っていました。大学卒業後、就職した民間企業は途上国に関わる仕事ではありつつも自分が思っていたような仕事ではありませんでした。改めて、国際協力の仕事をしたいと思い転職して、1 年くらいで震災が起き、現場に行きたいという気持ちがどんどん強くなっていったこともあり、国際協力の現場ではないんですけど、自分のやりたいこととつながる部分も多く、自然な流れの中で選んだこと、宮城に移住した感じです。

## 最初は女性支援を意識していなかった

最初は、被災地の支援を何かお手伝いできないかなという思いで来ただけだったのですが、たまたま立ち上げの時期に関わることになり、そこから女性支援の活動をしてきました。復興支援の活動していく中で、いろんな世代の女性たちの声を聞く機会があり、少しずつ活

動の中心が復興支援から女性のエンパワメントに変わっていきました。地域の女性たちが取り巻く状況として、家庭や職場でも性別役割分業意識が根強く残っていることがわかります。また、昔から続く地域では、“家”というものがまだまだ大事にされていて、家父長制が強く、家のしきたりや役割にしばられてしまう場面があります。そこでの生きづらさを抱えている、私よりも若い女性たちに出会いました。それまで自分はジェンダーの問題に特別な関心があったわけではないですが、地域に暮らす女性たちの声を聞くうちに、「この生きづらさは一体なんなのだろう」と考えるようになりました。ジェンダーやフェミニズムの活動をしている方々からいろいろ学ばせてもらって、ひとりひとりが悩んでいる問題はその人だけの問題ではなく、社会側にある課題なのだということを知りました。それを変えていかないと、若い世代が地方で暮らしやすくしていくのは難しいのではないかと感じています。東京や仙台などの都市部と地方とでは女性の暮らしや働き方にギャップがあり、仙台とこの地域では見聞きすることに大きな差があると感じます。だからこそ、地方の町で女性のエンパワメントの活動を行い、女性たちが安心して居場所が持てることには、とても意味があるのではないかと感じています。今も活動を続けているのは、それが大きな理由です。

### ◎栗林美知子さんのお話を伺って

#### 酒井真由子

栗林さんのお話を聞いて、支援ははじめから明確な目的や計画をもって始まるものだけではなく、心が揺さぶられ、「何かできることはないか」という思いに突き動かされるように、気づけば身体が動いている。そうしたあり方もまた大切なのではないかと感じました。

栗林さんは、「何か手伝えることはないかな」という思いからリュックを背負い、被災地に入り、ボランティアとして関わり始めました。その出発点に、子どもの居場所づくりや女性支援といった明確な目的があったわけではありません。遠くで起きた、予想もしなかった出来事に対して、支援の意義や活動の目的を考えるよりも先に、「何か手伝えることはないか」という思いが立ち上がり、栗林さんの感情や身体が動いていたのではないのでしょうか。

現代社会は、課題や目的を明確にし、計画を立てて実行していくことを重視しています。もちろん、それ自体は重要です。けれど、不確実性を伴う社会のなかで、予期せぬ出来事に直面したとき、まず心が揺れ、身体が動くことこそが、人との関わりや支援の出発点になるのかもしれない。目的や計画を立てることが重視されがちな現代社会において、こうした感情や身体の動きから始まる関わりは、むしろ失われつつあるものなのかもしれない——栗林さんの語りから、そのことを改めて考えさせられました。

活動の中で、栗林さんは、「女性たち」が避難所で高齢者や小さな子どもたちの世話をし、食事の準備を担うなど、多くのケアを引き受けていることに気づいていきます。私は栗林さ

んのお話を聞きながら、「女性たち」はまさに地域を支えるケアワーカーの存在なのだと感じました。だからこそ、「その女性たちが倒れてしまわないように、女性たちを支えるチームをつくろう」という代表の言葉は、とても重要な意味をもっていたのだと思います。栗林さん自身も、「何かできないかな」と、その一員として関わり続けてきました。

やがて活動は、女性たちとともに「新しい町をどうしていくか」を考えるまちづくりへと広がっていきます。視察や対話を通して、「子育てしている若い人たちが少しでも暮らしやすい町にしたい」という声があがり、栗林さんはその声を丁寧に聞いていきました。親御さんたちから寄せられた「子どもたちが思いきり走り回れる場所がほしい」という願いを受けて、子どもが主役になれるイベントが生まれていったことは、声に耳を傾けることが、具体的な形につながっていく過程を示しているように感じました。

そうした活動の中で「お母さんたち」の声に耳を傾け続けるうちに、栗林さんには、町のなかにあるジェンダーによる見えにくい仕組みが、少しずつみえるようになっていきました。そうした気づきは、やがて女性のエンパワーメントをすることへとつながっていきます。また栗林さんは、ひとりひとりが抱えている困りごとは、個人の問題ではなく、社会の側にある課題でもあるのだと気づいていきました。

目の前の一人の声に丁寧に向き合いながら、そこから社会全体のあり方へと視野を広げ、あきらめずに活動続けてきた栗林さんは、本当にすごいと感じました。

これまでの歩みの中では、きっと思うようにいかない場面も多くあったのだと思います。それでも栗林さんはあきらめずにその地にとどまり、活動続けてきました。小さな一歩を積み重ね、時間をかけて人と町に関わり続けること。その姿勢そのものが、子どもや女性、そして地域を支える力になっているのではないかと感じました。